

中国の都市計画

長野尚友 訳

目次

- 1 — 上海、西安、北京各市の生い立ち
 - <上海>
 - <西安>
 - <北京>
- 2 — 都市建設の課題
- 3 — 緑化と住環境
- 4 — 交通・輸送体系
- 5 — 都市構造と都市機構
 - <都市構造>
 - <都市機構>
- 6 — 計画決定の手続き
- 7 — 政治的な課題

訳者ことわり

この報告は、「オランダ物理的計画および住宅学会報」第53巻、No. 5 に掲載された論文「Urban Planning in China」の翻訳で、上海、西安、北京各市の都市開発革命委員会委員の談話をもとにした中国の1949年までの都市開発と3市の都市形態論の紹介である。引用されている文献の他には、K. ブキャナン著「中国大地の変革」<ロンドン、1970>およびナーベル著「百科全書案内」<ジュネーブ他、1968>などを参照した。

<上海>

上海は比較的若い都市である。西暦 1,100 年以来、海岸に近い揚子江の支流である黄浦河の左岸地区は恒常的な居住地となっていた。一般的な中国の都市計画のパターンと異って、この城壁都市は不規則な街路を持ち、ほぼ円形をしている。

19世紀、特に西欧帝国主義諸国による強制的な開港以後上海は強力な発展を遂げた。旧市の北部には租界ができた。即ち黄浦河の支流である武昌河の南に、先ず英米の、後には国際的な租界が置かれたのである。フランス租界は国際租界の南にあり、日本租界は武昌河の北岸にあった。もともと沼沢地であった水田地帯は、度々洪水の起ったところで、植民地として指定され、周到な排水事業や土地の理め立てによって建築のための敷地に改良された。しかしながら、建築工事は約 1,000 フィートの深さの不安定な砂質シルト層の上に安定した基礎を見つけない限りならぬという困難に直面した。上海では、いまだに本物の摩天楼が建てられたことはないが、フローティングファウンデーション<浮函基礎工法>による問題の解決により、コンクリート筏基礎の上に20階建程度のものが建築されるようになった。

この治外法権活動は異例の関心をひき起した。租界を持つ各強国は、それぞれ、公共施設、病院、教会、クラブ、学校、大学を備えた自立的な地域を造り上げた。国際およびフランス租界は、黄浦河左岸の埠頭で活況を呈していた。有名なフランスバンド<中国語では、ウェイテン>である。西欧帝国主義諸国は、それぞれの権力のシンボルを造った。即ち、壮大な銀行、ホテル、領事館、海運業や貿易会社などの建物がそれである。国際租界の中心軸は南京通りで、バンドの右隅を東西に走っている。国際租界とフランス租界の境界にある同じような通りはヤナン通りで、フランス租界の大動脈として機能した。工業は武昌河の上と岸壁に、そして黄浦河の右岸には造船工場などができた。これがブードン地区である<図 1>。租界の内外には、非常に悪い条件の中で、中国人の居住者が絶え間なく増加していった。極めて過密な住居と衛生設備の欠落は、この都市を何百万人もの中国人にとっての地獄にしてしまった。そして、その地

獄と並んで、おそらくは西欧の冒険者たちにとっての天国があったのだ。「上海は、都市がこのように発展すべきではないという代表的な例である」と、解放の数年前に、E・A・Gutkindは、その著書「環境の革命」の中で述べている。

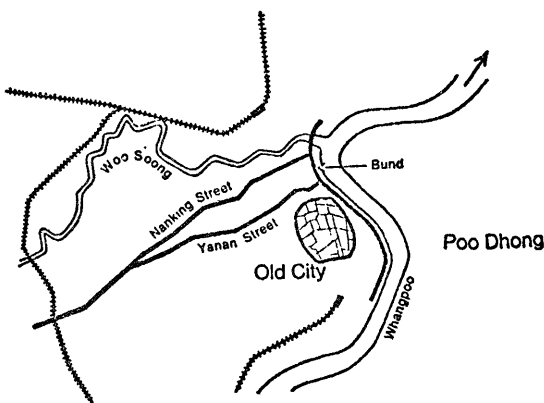
〈西安〉

中国北西部にある陝西省の省都であり、幾世紀にわたって、様々な名のもとに中国の首都であった西安は、紀元前 2,000年も前から存在した中国の極めて古い都市のひとつである。紀元前11世紀に、この都市は西部シュー王朝の首都として栄えた。数十万人の人口が集り、紀元前214年頃に万里の長城を築いた秦の始皇帝によって統一された中国の最初の首都であったが、唐の時代〈紀元618—907年〉に、この都市は長い興亡の期間の後に再び繁栄した。その当時、縦横5マイル×5.5マイルにおよぶ城壁内で、大規模な都市の拡張が行なわれた。左右対称の格子状街路が建設されたが、旧市にあった寺院のような基本的なものは残された。

その後も更に変遷が続き、唐の首都があった位置に新しい都市が生れたのは、明王朝の時代〈14世紀の末以降〉になってからだ。しかしそれは、かつての都よりもずっと小さく、大体、縦横1.8マイル×3.1マイルほどであった。この都市が現在の西安の基礎となったのである。壮大な城壁やいくつかの城門〈もともとは5つあった。即ち東側に2つ、他の三方にひとつずつである〉、そして特に、街路のパターンのような明王朝の都市の多くのものが今日も遺跡として保存されている。

2つの広大な街路の末端で、右の隅の方に互いに交差し

図一 上海市の概略計画



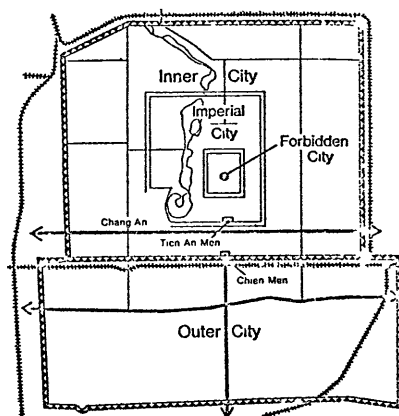
て、古い城壁にとりつけられている4つの大きな城門がある。郊外はこれらの城門のそれぞれから広がっている。この都市の真北の方角に鉄道の駅がある。この鉄道は、1,930年以来、西安と北部と東部の各都市とを結んでおり、ずっと以前にこの都市が保持していた支配的な位置を占めるかわりに、中国発展の外ペリにあって、数世紀にわたってかなり孤立していた状態を救うのに大きな貢献をしてきた。

〈北京〉

北京は西安より若く、この地に人々が定住したのは、紀元前 1,100年頃のことである。東アジアを横断するいくつかのルート上にあるというこの土地の戦略的位置が都市繁栄の因となった。城壁内部都市の配置は、今日でもはっきりとその跡を残しているが、それは、明王朝下の15世紀初め以来のものである。ほぼ同心の3つの矩形をした都市から成り、その最初が一番小さなものは、紫襟城であり、およそ3分の1平方マイル〈950メートル×750メートル〉の矩形である。その中には宮城があり、現在では博物館となっている。紫襟城の周りには内城があり、従来は政府等が置かれていた。ここは、ほぼ正方形をしており、紫襟城の約3倍の広さがある。城壁内部都市は、更にこの2つの周囲に縦横約4.4マイル×3.4マイルの矩形を形造っている。この城内都市の主な格子状街路は、北側の城壁の外にある濠から通水され、紫襟城の西側に沿って内部の南側に至る6つのつながった非常に美しい人造湖によって切断されている〈図2〉。

タータル市としても知られているこの城内都市はその南側で城外市〈あるいは中国市〉と接している。この城外

図二 北京市の基本計画



市は16世紀に城壁を築かれ、ほぼ正方形をした城内市に追加して造られた長方形のものである。いくつかの異った「都市」へ通じる門のうちで、天安門<天国のような平和の門の意>は最もよく知られている。城外市の北側の部分は、商業とショッピングの繁華街で、城内市と城外市を結ぶ前門のところ市に幹線鉄道の終着駅がある。しかしながら以前には記念すべき栄光あるこれらの宮城や門は、一般的な住民の心にほとんど影響を与えていなかった。彼らは、毎日土埃と泥の街に立ち向っていた。古い言葉が表現しているように、「風はなくとも道には三尺の土埃、雨が降れば泥の河」だったのである。

2 ————— 都市建設の課題

1949年の革命以後のこれらの3市における主な課題は、次の3点であった。

- a 工業製品の増産
- b 住宅の改善と拡充
- c 衛生施設の設置と改善

以下、簡単に要約してみよう。

a 工業化について

3市のうちでただ上海だけが、1,949年以前に、ある程度工業化されていたと言うことができた。上海では、例えば工場や労働者やその他あらゆるものを内陸部へ移送することによって、人口増加を抑制する努力がなされてきたにもかかわらず、同時に、工業製品の増産が強調されていた。現在上海では労働者が不足しており、オートメーションを必要としている。農産物の収穫期以外の時期には、1万人くらいの方々の人々が上海の工場で働いている。

西安と北京では、1,949年の状態は一層単純なものであった。両市のスポークスマンが強調したところによれば、解放前には「幾つかの直接消費材製造工場を除けば」<西安>、あるいは「封建的消費都市」<北京>における「工芸品の製造所」を除けば、工業はなかった。1,949年以降、工業に大きな力点が置かれた。西安では、何百もの小工場と幾つかの大工場が建てられた。北京でも同様で、人口350万人のうち、現在80万人以上の工場労働者がいる。西安では、文化大革命以後、都市人民公

社により、地域の住民自身の提案にもとずいて、様々な規模の1,000以上の工場が造られたことが、誇らかに述べられている。

b 住宅について

1,949年以来、上海では、約1,000万平方メートルが住宅ストックに加えられた。一方更に、1,500万平方メートルが改修され、現在総計3,200万平方メートルとなっている。一戸の住宅の平均面積は約43平方メートルで、この数字は、住宅の規模に関する幾つかの具体的な情報に比べて広い方であるように思える。

西安においては、1,949年以来500万平方メートルの新しい住宅が建てられた。それらの平均面積は30~50平方メートルである。この住宅建設は、巨大な人口増加に伴って行われたもので、人口は、1,949年の50万人以下から1970年には130万人に増えている。西安におけるこれ以上の人口増加は現在押えられている。北京における住宅建設は量的な観点から見て、最も印象的である。解放後2,000万平方メートルの住宅がストックに加えられ、1949年にあった1,300万平方メートルの1.5倍に達する。しかしここでも人口は大きく増えており、1,949年に160万人であったものが、1,970年には350万人になっている。他の諸都市に比べて、北京は明らかに相対的に特権的な位置を占めている。

しかしながら、この都市における住宅密度は更に高くなる筈である。西安全市で、1,970年の人口密度は1ヘクタールにつき150人であり、北京の各地区については<各地区は約50万人である>、1ヘクタール当り300人から400人である。上海10区については<1区平均60万人>1ヘクタール当り最少約700人から最大約2,900人で、平均すれば1,200人以上である。

c 衛生施設について

上海と北京において、1949年以前に労働者階級はどのように収容されていたかということについての詳細な記述がある。

北京の南部城壁都市には、非常に大きな住宅密集地域があったが、上下水道も電気もなかった。家々間の道路や路地は極めて狭く、舗装も悪く、また家々はみんな小さかった。悪臭の漂う溝が莫大な量の排泄物の容れものであり、同時に、明王朝時代以来ずっと使われてきた60万人の公認のごみ捨て場であった。街の低地帯である。

湿地は、マラリヤを媒介する蚊の培養地であった。

上海では、あばら家か穴ぐらに類する家の床面積が数百万平方メートルに達すると言われていた。西安のスポーツマンは、1949年以前の多くの不良住宅の存在と都市上下水道の欠如について真面目に語っている。

1949年以後の市当局の最初の調査は、その小住宅環境の改善のためのものを含んでいた。上海のスポーツマンは、不法占拠地帯にどのように取り組んだかについて述べた。先ず第1に、これらのあばら家の森の中に、火災避難路を切り開いた。次いで、道路が造られ、上下水道が改善され、公共電話が架設された。3番目に、商店や学校などが建てられた。それ以来初めて、次第に不良住宅が取りこわされ、占拠者たちは新旧の買上げ住宅に居住するようになった。この段階的なアプローチの魅力的なところは、より永久的な解決を予告した上での初期の暫定的な改良である。そして、現在もなお若干の不良住宅が残されており、少しずつ取り壊されることになっているということが述べられた。

西安の大改革は地下下水道網の建設であった。それは雨水と汚水の合流式であり、浄化された後は、田園地帯の灌漑用水として再使用されている。人々の使用のために流れている水は、今街中どこでも役に立っている。

北京のスポーツマンは、住宅の改良を初め上下水道、電気、そして場合によってはガス供給の設備設置を強調した。

3 ————— 緑化と住環境

北京の再植林事業をみると、国土を一大庭園にしようという毛主席の呼びかけに応じて、北京市民は市内と市の周辺に毎年50万本から60万本の樹を植えている。1949年以来、合計2000万本の樹々が植えられた。それらは、都市革命委員会植林部によって、乾季には毎日灌水されるなどの手入れを受けながらみごとに繁茂している。

北京は「緑色」の印象を与える。並木が新旧の建物を覆い、成長の速いポプラやエルムやプラタナスの樹々が平野や道路を彩っている。やや形式的な植樹方法にもかかわらず、市の多くの部分と周辺地域は、実際公園のような雰囲気を持つに至っている。結果として、微気候もま

た幾分か向上したと言われる。以前、寒い冬は砂や雪を吹き上げ、北京市を悩ませたが、今は冬の風がやわらぎ、温度もいくらか上がったように思われる。

<＊ 周囲の一般の気象と異形微小環境の気象のこと。>

また、3都市における団地や、周囲の住環境をみると、住宅建設の大部分は工場からあまり遠くないところに位置している。上海の約1000万平方メートルの新建設のうち、75の新住宅地<それぞれに1万～2万人の人々が住む>に800万平方メートルの住宅が建てられたが、多くの場合、明らかに市中央部から離れている。これらの住宅地の本質的な面とは、機能の分散化と活動の統合である。結果的には、それぞれの住宅地はかなり大きな一定の設備環境の組合せを有することになる。上海で与えられたそれらのリストは、恐らく十分ではないであろうが、それにしても述べておく価値はある。曰く、食料油店、穀物店、石炭店、熱湯暖房センター、それにまた理髪店、家庭用品の修理店、外来患者診療所、託児所、看護学校、小学校、図書館、そして郵便局、さらに地域革命委員会行政部の建物がある。より大きな地域レベルでは、この範囲は、レストラン、映画館、写真館、中学校、人民貯蓄銀行、繊維製品店を含むまでに拡大される。サービス機能は完全に分散化されていない。上海の南英路、北京のウォン・フォー・イエン大街には、スポーツ用品や楽器を売り、全体として市に役立っている「高級」店もみられる。活動の統合は、機能の分散化と平行して行なわれる。住民たちは、彼ら自身の地域の中で生活し、リクリエーションを楽しみ、買物をし、集会に参加する。そして、できるだけその中で働き、互いに親密になる。

4 ————— 交通・輸送体系

住宅の大規模な自給をすすめる努力を払う一方、この3都市における公共輸送機関は大きく拡張され、そして勿論のこと、都市道路網は増大し、その質は向上してきた。旧北京市の街路は、主として南北、東西に走っているが、幅の広いものはほとんどなく、また多くは他の道路と接続していなかった。拡張市部から分離した旧市の城壁は交通の障害であると考えられた。伝統的な蒼盤目型を破壊することなく、北京市は旧城壁を切り裂き、幾つかの

通りを拡げ、新しい通りと結びつけた。これらの大きなものは、旧宮城の壁に対して同心的な、市を一回りする形での幾つかの広い輸送水路を形成している。これらは再び、12の新動脈に接続し、城内市から周辺部へ放射状に走り、幹線道路は他の各省へと続いている。北京における舗装道路の総延長は、1949年の約133マイルから1972年には1,240マイルに伸びた。最もよく知られている東西の通りは長安街で、毎年10月1日に天安門広場で行なわれるパレードの光景は有名である。この通りは8車線から成り、広い舗道に緑色の並木があって、端から端まで全長25マイルのうちの約6マイルである。西安新道路は40フィート幅の歩道のある60フィート幅の通りである。これらは家々の間を通っている自転車道と歩道に続いている幹線道路である。1949年には、西安市に、17台のバスしかなく、そのうち6台だけが運転されていたが、現在では280台と100台のトロリーバスがある。

北京のバスとトロリーバス総数は、1949年には164台であったが、現在では2,000台以上となっている。

しかし、これらの数字はかなり飾られたものであり、公共輸送問題は、比較的進展が見られなかった幾つかの都市問題の一つであるし、したがってまたそこでは需要の超過が明らかとなっている。例えば、上海では現在2,200台のバス・トロリーバスがあるが、路線の数は3倍に、総路線の長さは10倍に増加しているにもかかわらず、バス・トロリーバスの総数では1949年の1.5倍の増加でしかない<Graham Towers著、中国の都市計画・英国都市計画学会報1973年3月号127頁>。

1969年以来、北京には東西に走るおよそ14マイルにわたる地下鉄があるが、この線を北京市内の回りを走っている現在の鉄道に沿って、大きな接続線に拡張しようという計画がある。また将来には幾つかの放射状線も追加される予定である。

しかし、北京市民の必要性からは、路面公共輸送方式のほうが地下鉄よりも市近辺を移動するにはベターであると一般に受けとられており、その際、市の中心からの分散と集中の原則を評価する為の基準が考慮されることになる。上海市の公共交通網図によれば、多くの交通路線が合流している中心部が殆んどないのに対して、昔の路面電車、バス・トロリーバスの路線は全市に渡っており、比較的系統だっている。北京では、天安通りやそ

の他の幾つかの中心部にある中央通りがもう少し多くなっている。

しかし、上海や北京ではバスその他の公共交通機関は高頻度に来るし、またしばしば満員なのではあるが、このことはかならずしも中央への集中度を示しているものではない。

なお、北京の交通輸送はトラックと自転車が主要な輸送手段となっている。貨物を積んだ無数のトラックが主要幹線道路を走っている。實際上、殆んど全ての交差点には、自転車や軽量車<手動式>が整然と並んでいる。こうした交通状態は、かなり混乱した印象を呈しており、また運転手は左側よりも右側運転をより多くしているように見えるけれども、交通事故はきわめてまれのものである。トラックは自転車よりも数量的には少ない。良く整備された頑丈そうな黒色の自転車が数多くの男性や女性のための交通手段となっている。さらに、バスやトロリーバスや循環タクシーが、ロシア製タクシーや少数の中国製乗用車、さらに外交機関の西欧の自転車と共に、街路に見られる。西安ではトラックの数の方が手押車や三輪車よりもずっと少ない。

自転車はここでは都市交通としては一般的ではない。ここでの最も極立った特徴は大部分の乗物が人力か動物<ロバ>によって動かされていることである。建築材料のような重量物がこの方法で運搬されている。

上海は上記の2つの市の中間の位置を占めているように思える。すなわち、ここでは自転車が少なく、自転車タクシーが多く、トラックは幾分少なめである。

しかし、通りは同様に、交通機関を使用していない歩行者で一杯である。明らかに、歩行者は通りでは安心して大手を振って歩くものと考えられており、また交通事故が起った場合でも罰せられるのは運転手であるという態度をとっている。その結果、警笛やベルは殆んどひっきりなしに鳴らされつづけねばならず、その騒音でつんぼになりそうである。ツェンツォウでは農民達はちょうど市外にある空港への道路上で打穀をしていて、我々の乗用車は、穀物の間を通り抜けていかなければならなかったほどであった。上海では、住民達は夕方になると家の外に出て腰を掛けている。それが住宅の一部によりかかるとか、道端の縁石に腰掛けるとかしているのでもなく通りにじかに坐っている。

〈都市構造〉

以上の3都市の都市構造は結果的には類似していない。上海では、市からの主要道路沿いにある衛星都市や郊外地への開発がすすめられているといえよう。専門的な立場からみると、この発展方式はストックホルム方式に多少匹敵するといえよう。しかし、スウェーデン首都計画、主要な役割を果している衛生都市と中心部との重要な連結機関である高速鉄道〈Tunnel bana〉は上海ではほとんど存在しないばかりでなく、目標となってもいないようであり、また、中心部からの分散とそこへの集中とが調和していないように思われる。

西安はまた違った様相を呈している。新規の拡張は現在の城壁の外側へと展開しており、この拡張は現在の立地構造からさらに城壁の外側へのあらゆる方向に格子状道路で展開されることに力が注がれているが、これはまるであつてのタン市を再現するかのよう調和と整然性の維持に注意が払われている。北京ではこうした両市の傾向を結合させている。即ち、現在の北京市に連結したあらゆる方向に発展させると共に、またそれとは別個の開発がなされてきた。

〈都市機構〉

西安市の130万人の住民は、いくつかの都市区〈Section〉にわかれており、次に全部で34の都市人民公社〈Urban People Communes〉に分割され、1人民公社には平均3万8,000人の住民がいる。この数は、公社の境界が地理的基準で画されているので、その場所によって変わることがある。各都市人民公社は居民区〈Residents' Group〉によって、更に細分割され、1公社は約10の居民区からなっている。1居民区には、約4,000人の居住者がおり、この数値も居住敷地や居民区の規模によってかなり変わると思われる。

都市区、都市人民公社、居民区は文化革命以来設定されてきた機関である革命委員会によって運営されている。この革命委員会は、ある程度、我が国の自治体に匹敵されよう。都市人民公社や居民区の革命委員会は、主として次のような機能を果している。

a. 政治的訓練〈説得〉。とくに毛主席の諸著作の研究、討論をする中で、人民の階級的立場を強く認識させ

ること。

b. 大規模産業その他に雇用されていない人達の生産的労働の促進と組織化〈西安では都市人民公社が1,000の企業を創設した〉。

c. 衛生状態や健康改善のための運動の組織化。

さらに、都市人民公社や全ての居民区は、多数の都市人民を、政治的意思決定にまきこむことや、彼らを動員する可能性を有している。北京でのそのような組織的活動の本質は、西安におけるのと異なっていないが、名称とか機能とかは全く同じとは言えない。最高位の市革命委員会の単位は区〈District〉であり、40~50万の居住者がいる。これに続く単位は、約4~5万の住民単位で構成されている街道〈Street Groups〉で、街道委員会〈Street Committee〉が代表している。1,000~2,000戸の世帯をもつ最小単位は、居民区〈Residents' Group〉によって形成されている。これは、居民委員会〈Residents' Committee〉が代表している。

区及び街道委員会は西安市の都市人民公社としての機能の他に、更に都市管理的面とか教育面での機能も果している。居民委員会は特定の管理機能をもたないほぼ任意組織であり、これは居住者自身の問題に関係し、部分的還境衛生や先に述べた意思決定機能や動員機能に関係している。上海での状況は北京と殆んど同じであるが、諸団体の名称は少々異っている。

もちろん、都市地域全体を管轄している地方行政組織がある。

例えば都市計画に対する責任をもっている都市建設局のような、特定の機能を有する幾つかの常任事務局がある。しかし、ごくまれではあるが、より下部の管理組織体がこれらの機能の一部を遂行する。大工場もまた地方行政組織からかなり独立した独自の機能を果している。

これらの大工場は企画ばかりでなく、労働者の住宅、健康管理、保育、厚生施設等にも責任をもっている。

6 ———— 計画決定の手続き

中国における計画策定の基本原則は下部から上部への、また上部から下部への2つの政策調整ラインのぶつかりあいに置かれている。上部から下部へのラインでは、上

級機関が実情と可能性や必要性の調査の後、ある計画を作成すると、それを直接下部機関にコメントさせ、より精密化させながら論議していくという結果となる。その下部機関はさらにその計画を、次の下部機関と討議し、最終的に最下部単位体、つまり地方の生産諸組織体や都市の居民区に送るし、その計画がコメント付きで提出されるまで論議をかさねる。

次に下部から上部への全く反対の動きがあり、そこではある対抗する計画が最終的には、国家計画委員会のような、最上部機関にまで持ち込まれ、ここでその2つの計画が比較される。もし、重大な意見の相違がある場合には、最上部機関が意思決定をするが、通常は下部から上部への計画ラインはより高い生産ノルマとより大きな努力に基づいているので、最上部の組織体の役割は下部からの過大な野心的計画をよりおだやかなものにすることに限られている。

参加という用語はこの手続きでは問題とならない、何故なら計画は人民から、人民へと、人民の要求によって作られるからである。

こうした計画決定の手続きが産業の発展や人口の増大のような領域での都市開発を究極的には規定している。拡張その他の計画設定の際の具体化は北京からの指示によって判断するために幾分官僚的に遂行されている。

市革命委員会は<上述の手続きに従って、投資決定等に沿って>拡張計画を作成し、建設に参画している労働者、幹部等の意見を求める。この意見聴取は討論形式や図面やモデルの展示<公開>の形式をとっているようである。修正意見は、もし革命委員会がその改善をはっきり認めれば受け入れられるようである。

筆者の印象では計画の主要な部分を変更したり、修正をより詳細にわたって行なうことはむしろかきいようであった。しかしながら、施行の際には実際の経験によって、諸改善がなされるようである。その際、諸々の衝突、争いはそう簡単にはもちあがってこないであろう。というのは一方では、あらゆる活動が例えば住宅建設の分野においては、とにかくにも多数者の生活条件の巨大な改善を意味しているからであり、また他方では、政治的にみれば、信頼されている人民の代表者がはっきりと人民を代表しており、また彼らの利益を守り、人民のうちの最も政治的に意識のある人達から成っているような状

態の下では、こうした闘争を想像する事は、むしろかきいからである。

7 政治的な課題

結論的には、中国社会でおきているいわゆる格差<contrast>があげられよう。

- ◎ 知的労働と肉体労働との格差
- ◎ 農業と工業との格差
- ◎ 都市と農村との格差

人民の努力によってこうした格差を排除し、上述の要素を統合し、階級なき社会を指向しなければならない。

このように政治的脈絡も都市開発の中を貫いている、知的労働と手工<肉体>労働間の格差は大学生を社会的、物理的に孤立させないようにすることによって歯止めされている。大学教育や研究が学生や教師による活発な農工業生産により、^①服薬^②を与えられるばかりでなく、高等教育機関もまた住宅地域、工業地域、田園地域に移動されつつある。

西安市では文革前には21の大学や高等教育機関<恐らく西欧のものに比較しうる>が市の一角に集中していたが、文革後にはこれらは都市のいたる所に分散させられたり、また一部では、例えば農業大学は農村地域に、或いは鉱業学校は鉱業地域に移転させられた。「教育は生産に密接に結びついていなければならない」と西安のあるスポークスマンは言っていた。

北京市においても見受けられ、ここでは、^③余りにも多くの知識階級が人民大衆から切り離されている^④。後者の告発は、北京においては、清華工業大学<この学生は文革で主導的役割を果たした>の孤立した大学キャンパスの性格を考慮するとあながち不当であるとは思えない。同様に、理論と実践の統一は、中学、小学校教育でも進行している。知識人、学生、教師は地方へと、時には短期間、時には永久的に移住している。西安市では、13万人の学童が1970年に地方へ移動し、このうちの一部は永住する。

工業と農業の格差から生じる政策は中国の発展にとって極めて重要である。中国は1949年以降、まずソビエトの発展モデルの刺激を契機として工業開発に重点がおかれ

たが、1958年以降、経済発展の重点は次第に農業部門に移行してきた。「農業は経済発展の基本であり、工業は指導的役割である」というスローガンがこの辺の事情を表わしている。地方は無数の小規模企業で工業化されており、またもちろんこうした分野に投下された資本は都市における同様なありとあらゆる投資を犠牲にしているのである。

西安市では、農業加工生産物が地方において次第に増大しているばかりでなく、さらにそこでの労働者が周辺農村から増々補充されつつあるといわれている。

都市と農村の格差は、最初の2つの格差<知的労働と肉体労働・農業と工業との格差>を縮小させようとした結果から実際上生じたものである。

多くの典型的な都市活動は厳密に分散されており、またそれは非常に多くの人民に親しまれている。例えば、巡回劇団、舞踏団は国内の辺りな所でさえも活動を行っており、また、多くの教育的施設も地方へと移動されている。もちろんこうした移動は一つの方向にだけなされているわけではない。如才ない心理的洞察をもってすれば、中国では、知識層の集団が、農民が彼等の実践的知識や経験について言わねばならないことに対して注意深く耳を傾けているのがわかるだろう。

こうした同一化のもうひとつの例が、1968年以来開設された幹部学校によって提起されている。その狙いは、頭脳労働者の間にある、地方や農業労働や産業労働からの離反現象を阻止しようとするところにある。幹部たち、すなわち都市の行政機関や産業関係の上級官僚は、原始的環境の中で、6カ月から1年間生活し労働している。彼らは自分たちの家を見て、工業をおこし、土地を耕作する。彼らはこれらの事柄について周辺の農民、労働者から指導を受けている。

こうした方法によって、彼らは自らの経験によって、中国の農民、労働者の生活を知り、その結果、彼らがいったん公的地位に戻った時、農民や労働者に対してより良く奉仕できるようになる。こうした統合への追求や風潮は、分離して独自にすすめられるという考え方がだんだんなくなり、都市開発の地方との関係がますます重要になっていることを意味している。

<横浜市建築助成公社理事長>